

アトモスフィア

私立大学における研究はいかにあるべきか

山本 郁 男*

我が国の研究・教育はほぼ国立大学と私立大学によって支えられている。近年の生命科学や創薬科学に関する知見や技術の進歩は目をみはるものがある。このような中において私立大学における研究の現状はどうであろうか。将来を含めて考えてみたい。

私は国立10年、その後私立3校を転々とし40年、合計50年の研究生活を、細々とながら現在でも続けている。大した仕事もなしえていないが、教育と研究は、その比重として常に50:50であるべきだと思っている。30代前半からの私大における研究は、まさに中国の故事にある「螻蛄の斧」であり、「切齒扼腕」「胸突き八丁」の連続であった。科研費の不採択、上司との軋轢等々、悶々とした時期も体験したが、通して感謝の気持で研究を続けられている。アメリカ留学後、科研費の奨励研究(80万円)が採択され、興奮したことを覚えている。大学教員は研究が背後にあって初めて教育者たりえると叩き込まれているので、いかなる環境にあろうとも研究は続ける、いな続けなければならないと今でも確信している。もちろん、研究自体に国立と私立に本質的な差異があるわけではない。だが、トータルに考えると、その違いは大きい。「私立に移った君が悪い」と言われれば反論はできないが、私立には私立なりの研究方法はありそうである。

一般に、研究成果は環境、設備、人材、研究費、研究時間のたがいの積によって決まると思う。一方、私は「研究は芸術である」との持論があり、上記の5つのファクターのほか、 $+α$ が加味される。 $α$ というのは、人材としての研究者自身の個性(趣味を含む、感性とでもいおうか)であろう。ここが、私立が国立に勝れる唯一の点かも知れない。飽くなき探究心はここから生まれる。地方大学出身者である下村 脩博士のオワンクラゲからのGFPとイクオリンの発見によるノーベル化学賞の受賞は、まさに探究心と博士自身の執念の賜に違いない。自省の念頻りである。

ここで国立と私立の違いを若干比較してみたい。大学の数は国立1に対し私立8という。この数の比は文系・理系の合計であるので、この差はさらに開くであろう。これを最近の科研費の配分で見ると国立70%に対して私立はわずか15%とその格差は著しい。

ちなみに、これを生物系、理工系、人文・社会系に分けてみると、各々45%、40%、15%となり、生物系の配分が最も多い。旧帝大の配分額は全体(1,970億円)の20%である。

平成21年度の私立の配分額合計額は1位慶応、2位早稲田、3位日大。1位の慶応は30億円であるが、国立を含めた9位は筑波大の36億円で、その差は6億円である。私大の科研費採択機関は522校におよぶものの、最下位の採択件数1件、26万円であるなど、まとまった研究ができる額ではない。環境・設備は研究費に反映するので、私立はますます国立と差がつく。私はいまだかつて電子顕微鏡のある大学にいたことはない。近くの国立大の施設を借りた。放射線同位元素研究施設は現在の勤務大学にはない。

今日、私大は少子化に伴い定員割れの大学も多い。大学経営も楽ではない。学納金からの研究費の支出は次第に難しくなっている。共同研究費として数千万円を設けている大学もあるが、恩恵にあずかる教員は2~3割程度、そこで研究は個人研究費と外部資金に頼らざるを得ない。また定員割れによって全入時代となり、低学力の入学生の比率が漸増。研究時間はややもすると教育時間に割かれる。教育の負担は雑用も含めて、とくに若手にも及ぶ。私立の研究は目下、瀕死の状態といっても過言ではない。私立の研究で重要なのはテーマである。オリジナリティーの高い研究をする。他人が手をつけられない独創的な研究材料を選ぶにつきる。私は恩師の方々の援助により、「大麻の毒性研究」を続けている。「大麻」という容易に入手できない資料のため、今日まで研究を持続できている。

今後、私立の研究は、以上述べたファクターを考え、阻害要因をできる限りミニマムに抑え、研究時間、人材を有効かつ集中的に投入して研究成果を挙げなくてはならない。さらに、人材、設備などの連携を密にし、共同研究の枠を広げ、高度化・先端化する時代のスピードに遅れないように、「真理はただひとつ」とする探究心と共同研究者の絆を忘れないようにすべきであろう。

*北陸大学名誉教授、九州保健福祉大学教授、元本会北陸支部長